

日本での文字(漢字)使用の始まりについて、具体的に解説してください。

東 アジア共通の文字である漢字の書かれたなんらかの物が、日本列島に持ち込まれたことが初めてわかるのは、弥生時代にあたる紀元後1世紀のことである。『後漢書』東夷伝に、西暦57年に倭の奴国が後漢に朝貢し、これに対して後漢の光武帝が印綬を下賜したと伝えられており、福岡市志賀島で発見された「漢委奴国王」金印がこれにあたりと考えられている。また、弥生時代の遺跡からは「貨泉」と書かれた中国の貨幣もみつまっている。しかし、日本列島内に持ち込まれた金印や貨幣が、その本来の目的通りに使われたとは考えがたい。この時代の印は、文書や荷物が途中で開封されないように泥を使って封じる際におされるが、この仕組みが日本列島内で使われた痕跡はまだない。貨幣の流通も弥生時代には想定しがたく、これらは舶来の珍しい宝として扱われたにすぎないだろう。

弥生時代後期の状況については、『三国志』魏書東夷伝の記述が参考になる。邪馬台国の女王卑弥呼は、魏王朝から「親魏倭王」の金印を授かった。また、銅鏡100枚も下賜されたと伝えられ、鏡のなかには文字の鑄出されたものもあったかもしれない。それだけでなく、魏からは外交上のやりとりに際して詔書が送られ、また邪馬台国が狗奴国と対立した際には、支援を示した木簡による文書とみられる檄^{げき}も送られている。こうした魏からの公的文書が届いた邪馬台国側で、それらを読む者がどの程度いたかはわからない。『三国志』での邪馬台国の記述が詳細であることからすると、魏から出向いた使者がしばらく滞在し見聞したのかもしれない。その場合は、使者が読んで聞かせた可能性はあるだろう。彼らのような

文字を読み書きできる者が、短期的にでも列島内にいた可能性はあり、そこから文字が伝わることもありうる。

みつまっている最古級の文字資料について

では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、実際に日本列島内で文字が書かれた可能性を示す遺物として、どのようなものがみつまっているかを紹介したい。

文字が実際に記されている土器や木製品については、紀元前1世紀から紀元後4世紀にかけてのものとして、表1にあげたような事例がある(巻頭図版も参照)。しかし、これらのうちには文字のようにもみえるし、文字でないようにもみえる曖昧なものも含まれる。いずれも書かれているのは1文字から数文字程度であり、文字が書かれたことの意味合いについてもまだよくわかっていない。今後事例が増え、検討が進むことが期待される。

弥生時代以降の墳墓からは、文字の鑄出された鏡もみつまっている。しかし、これらを手にした当時の人々の多くは、文字の内容を理解できていたとは考えがたい。古墳時代前期に大陸製の鏡をまねてつくった日本列島産の鏡のなかには、本来は文字が書かれていた部分をまねながらも文様のデザインにしてしまったものがあり、文章を記していたことが理解されていなかったと思われる。こうした遺物の状況からは、古墳時代前期になっても、人々はまだ文字を使いこなしてはいないと考えられる。

一方で、弥生時代の遺物として近年注目されているのが、「すずり」とも考えられる板状の石である。

時期	遺跡名	所在地	遺物	記載方法	文字
紀元前1世紀頃か	塚崎東畑遺跡	福岡県久留米市	丹塗祭祀土器か	顔料	□□□□□(あるいは文字でない?)
2世紀末頃	大城遺跡	三重県津市	高坏	刻書	□(「奉」もしくは「年」)
3世紀	貝蔵遺跡	三重県松坂市	壺	墨書	田
3世紀中頃	大戊亥・鴨田遺跡	滋賀県長浜市	甕	刻書	□(「ト」か)
3世紀中頃	三雲遺跡	福岡県糸島市	甕	刻書	竟(「鏡」か)
3世紀後半頃	根塚遺跡	長野県木島平村	土器片	刻書	大
3世紀末頃	市野谷宮尻遺跡	千葉県流山市	壺	墨書	久
4世紀初頭頃	柳町遺跡	熊本県玉名市	短甲留具	顔料	□□□田
4世紀前半頃	片部遺跡	三重県松阪市	壺	墨書	□(「田」か)

表1 4世紀までの出土文字資料(吉村武彦ほか編『シリーズ古代史をひらく 文字とことば——文字文化の始まり』(岩波書店、2020年)より作成)

表面を擦った痕跡のある石製品について、これまではほぼ砥石と考えられてきたが、近年では墨を擦った「すずり」とする考えも提起されている。複数の遺跡でみつかっており、墨を擦った「すずり」とすれば墨書が広まっていた可能性も出てくる。しかし、筆や文字の書かれた遺物あまりみつからないこともあり、実際にどのぐらい文字が書かれていたのかという点については、今後の検討を要する。

文字(漢字)の使用はその後どのように展開したか

日本列島内で、文字を利用して文章や記録がつくられたことがわかるのは、埼玉県稲荷山古墳から出土した辛亥年銘鉄剣の頃からである。辛亥年は西暦471年と考えられ、古墳時代中期に相当する5世紀後半には、漢字を使って文章をつくらることができるようになっていた。同時期のものとして、熊本県江田船山古墳出土大刀や和歌山県隅田八幡神社人物画像鏡など、5世紀後半から6世紀初頭にかけての金属製品に漢字を使った文章が残されており、その頃には文字を使って文章を記す技術者が日本列島内に存在していた。

辛亥年銘鉄剣に記されている「獲加多支鹵(ワカタケル)大王」は、『日本書紀』の雄略天皇と考えられるが、『日本書紀』には雄略天皇の時代に史が宮廷内での文筆や外交活動に活躍したことが記されている。史は朝鮮半島からの渡来系の文筆技術者で、この時期には渡来系の集団が文筆技術を保持してヤマト政権に仕え、外交文書の作成や解読、さらに記録作業などを担当した。倭の五王の1人である武(ワカタケル大王=雄略天皇に相当する)が478年に宋王朝に送った上表文が中国の史書『宋書』に引用されている

が、こうした上表文を書くことのできた人材が、倭の宮廷に仕えた史だったと考えられる。

また『日本書紀』には、6世紀になると、屯倉の経営のため農耕労働者の籍(名簿のような書類とみられる)が作成され、また史によって船の賦(港を利用する船に課した税か)が記録されたと書かれている。行政上の手続きに文字を利用した帳簿がつくられたようである。しかし、まだ全国一律に文字利用がなされたわけではなく、特別な技術をもった史の集団による文字利用という面は残っていた。

限られた集団による使用という状況をこえて文字が国内に広がるのは、全国的に帳簿を作成し行政手続きを進めはじめてからだろう。遅くとも670年に庚午年籍が作成された時期までには、全国的な文字利用の拡大が想定される。戸籍は、当時の国またはその下部こおりの評で作成されたと考えられる。地方行政に携わる官人たちが、業務のために文字利用を身につけ、文書作成に練達していったのだろう。7世紀後半になって地方遺跡からもみつきりは始める木簡は、こうした地方官人たちが文字を使って文書や記録を書いたことを物語る。7世紀後半には、行政にたざざる者にとって、文字の使用を身につけることが必須になってきていたとみられる。

一方で、庶民には文字はまだ普及しなかった。さらにのちの平安時代になっても、文字を読み書きできる人々の割合は、都や諸国の国府のように識字層が多く住んでいる都市的空間を除けば、一般の集落のなかでは低かったと考えるべきである。

(かねがえ・ひろゆき/学習院大学文学部教授)

鉄砲伝来年の諸説について、具体的に解説してください。

鉄 砲伝来年は、現在、1542年説と1543年説（従来からの通説）とがある。

ポルトガル人の日本初来や、鉄砲伝来に関する基本的な史料は、次の4点である。

【ヨーロッパ史料】

〔史料1〕エスカランテ(スペイン人)が、ディオゴ＝デ＝フレイタス(ポルトガル人)から入手した情報(岸野久『西欧人の日本発見』吉川弘文館、1989年に所収)

〔史料2〕ポルトガル人アントーニオ＝ガルヴァン『諸国新旧発見記』(1563年刊行)

【日本史料】

〔史料3〕^{ぶんしげんしょう}文之玄昌『鉄炮記』(慶安2(1649)年成立の『南浦文集』や『種子島家譜』巻四〈鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料』日記雑録拾遺、家わけ四、鹿児島県、1994年に所収))

【中国明代の史料】

〔史料4〕鄭舜功『日本一鑑』窮河話海、巻二、器用条

それぞれについて簡単に内容を紹介しておこう。

〔史料1〕の内容は次の通りである。フレイタスと一緒にシャムにいたなかの、ポルトガル人2人がチナ(中国)沿岸で商売しようと、1隻のジャンク船で向かった。だが暴風雨にあってレキオス(琉球)のある島へ漂着した。そこで彼らはその島々の国王か

ら手厚いもてなしを受けた。その後、ほかのポルトガル商人たちもチナのジャンク船に乗って再びそこへ行った。今回は上陸を許されず、商品および値段覚書と、対価の銀とを交換した。

〔史料2〕は、〔史料1〕と同一の情報をもとにして、推測や未確認情報を排したものと考えられる。同書の内容は、次の通りである。1542年、ディオゴ＝デ＝フレイタスが、暹羅(シャム)国ドドラ市において、一船のカピタンであった時、その船より3人のポルトガル人が一艘のジャンク船に乗って脱走し、シナ(中国)に向かった。彼らの名はアントーニオ＝ダ＝モッタ、フランシスコ＝ゼイモト、アントーニオ＝ペイショットという。北緯30度余に位置するリャンポー(双嶼。中国人密貿易商すなわち後期倭寇の拠点)市へ入港することを目的としていたが、後ろより大きな暴風雨に襲われ、彼らを陸より隔てた。数日して、東の方32度の位置に一島がみえた。人がジャボンエスと称し、古書にその財宝について語り伝えるジパンガスであるようだ。この諸島は、黄金・銀その他の財宝を有している。

〔史料3〕は、もっとも著名なものだが、『鉄炮記』編纂の時期が、慶長11(1606)年に下ることや、編纂の動機が種子島時堯の鉄炮入手を記念して、孫の久時が顕彰の意を込めて書かせたものであることに留意する必要がある。

「天文癸卯(天文12(1543)年)秋八月二十五丁酉」、種子島の西村という小浦に、船客百余人を乗せた大船が入港した。そのなかに大明儒生五峯(後期倭寇の頭目である王直)がいた。西村をおさめていた織部丞は、砂の上に文字を書いて、五峯との間で筆談

をした。織部丞は、乗船している客は、どこかの国の
人かを尋ねた。五峯は、彼らを「西南蛮種の賈胡」(ポ
ルトガルの商人)と説明した。

織部丞の指示で、船は、島主の種子島時堯がいる
赤尾木の港に入った。「賈胡の長」2人は、鉄砲を持
参していた。2人の名は、「牟良叔舎」と「喜利志多
佗孟太」である。通説では、〔史料2〕の人名と対照
させて、「牟良叔舎」はフランシスコ、「佗孟太」はモ
ッタの音訳と解されている。

彼らは、種子島時堯の目の前で、鉄砲を使用して
みせた。鉄砲は鉛玉を、火薬を使って発射するもの
で、的を岸畔におき、身をおさめて目を眇にして、
百発百中での的を撃った。時堯は、高額な鉄砲2挺を
購入して「家珍」とし、家臣の篠川小四郎に火薬の調
合の仕方を学ばせた。さらに時堯は、「鉄匠」(刀鍛
冶であろう)数人に、鉄砲の鍛造を命じた。その結果、
外形はよく似たものができたものの、底を塞ぐ技術
(尾栓の製法。とくに雌ネジを切る技術)がなかった。

翌年、「蛮種の賈胡」が、種子島の熊野浦に来航し
た。「賈胡」のなかに「鉄匠」が1人いた。そこで時堯
は、矢板金兵衛尉清定に、底を塞ぐ技術を学ばせた。
その修得には時間がかかったが、1年余りののち、
「数十の鉄砲」を製造することができた。

〔史料4〕の著者の鄭舜功は、明の新安郡の人で、
嘉靖35(1556)年来日して豊後国(大友氏の領国)
に滞在した。『日本一鑑』は、その見聞にもとづいて
撰述された日本研究書である。同書は、「手銃」につ
いて、初め「仏郎機国」(ポルトガル)より出て、「国
の商人」(中国の商人、すなわち後期倭寇)が始めて
「種島(種子島)の夷」に伝えてつくったものである、
と説明している。

以上をみていくと、ヨーロッパ史料の〔史料1〕
〔史料2〕は、ポルトガル人の来航を述べるのみで、
鉄砲に関する記述はない。種子島への鉄砲およびそ
の生産技術の伝来を述べているのは〔史料3〕〔史料
4〕である。また年次は〔史料2〕が1542年、〔史料
3〕が天文12(1543)年とある。通説の1543年は、〔史
料3〕に依拠している。

〔史料1〕は同じ島に2度、〔史料3〕は種子島に
2度、ポルトガル人が来航している。これまで、ヨ
ーロッパ史料と『鉄砲記』の2度の来航は同一のも
のだと考えられてきた。

清水紘一は、『種子島家譜』には、禰寝重長の種子
島侵攻事件と鉄砲伝来とが同年であるという歴史的
記憶が反映されているとし、『島津貴久記』が前者を
天文11(1542)年としていることから、鉄砲伝来は
天文11年とした(清水紘一『織豊政権とキリシタン』
岩田書院、2001年)。

村井章介は、関連史料の検討を踏まえて〔史料2〕
と〔史料3〕との関係を吟味し、〔史料3〕の年次を
1年前にずらし、天文11年としても、史料間に矛
盾はないとした(村井章介『世界史のなかの戦国日
本』筑摩書房、2012年。同『日本中世境界史論』岩
波書店、2013年)。

教科書『新日本史 改訂版』(山川出版社、2018年)
は、清水・村井説に依拠して、「ポルトガル人の交
易は、初めは海禁政策をとる前から正式に認められ
なかったため、彼らは中国人密貿易商と組み、アジ
アの交易ルートに乗って日本に至った。鉄砲を伝え
たとされるポルトガル人は、おそらく1542(天文
11)年、シャム(タイ)から中国人密貿易商の王直の
船に乗って種子島に着いたものとみられる」(p.142
~143)と説明している(「おそらく……とみられる」
と表現していることに留意)。また「1606(慶長11)
年に種子島氏の依頼でまとめられた『鉄砲記』に拠
って、これを1543(天文12)年のこととする説もある」
(p.143)と注記している。

これに対して、中島楽章は、〔史料1〕〔史料2〕
と〔史料3〕とは異なるできごとを述べていると考
える。前述した「牟良叔舎」をフランシスコの音訳と
するのはかなり疑わしく、またモッタは一般的な姓
であり、それをもって同一人物とみなすとは難しい
という。そしてレキオスすなわち琉球に1542年・
1543年の2度来航し、後者がそののちに種子島に
来航し(1543年)、1544年に再度種子島に来航したと
解している(中島楽章「ポルトガル人の日本初来航と
東アジア海域交易」〈『史淵』第142輯、2005年)。同「ポ
ルトガル人日本初来航再論」〈『史淵』第146輯、2009
年)。同『大航海時代の海域アジアと琉球』(思文閣出
版、2020年)など)。

以上、鉄砲伝来年の諸説は、異なる地域の史料相
互の分析によって提起されているのである。

(せき・しゅういち／宮崎大学教育学部教授)